

「インポッシブル」★★★★

2013（平成25）年6月16日鑑賞
TOHOシネマズ梅田>

監督：J・A・バヨナ
マリア・ベネット／ナオミ・ワッツ
ヘンリー・ベネット（マリアの夫）／ユアン・マクレガー
ルーカス・ベネット（マリアとヘンリーの長男）／トム・ホランド
老婆／ジェラルディン・チャップリン
トマス・ベネット（マリアとヘンリーの次男）／サミュエル・ジョスリン
サイモン・ベネット（マリアとヘンリーの三男）／オークリー・ペンダーガスト
2012年・スペイン映画・115分

配給／プレジディオ

<あれはパニック映画ではなかったが、さてこれは？>

2011年2月19日から日本で公開されていたクリント・イーストウッド監督の『ヒア アフター』（10年）は、同年3月11日に発生した東日本大震災のために3月14日限りで上映が中止された。これは、同作冒頭に登場する東南アジアのリゾート地を突然襲った大津波の描写がリアルで迫力満点だったためだ。もっとも、私の評論で「これはパニック映画？いや、そんなはずは・・・」という小見出しを付けたように、同作は『インデペンデンス・デイ』（96年）や『デイ・アフター・トゥモロー』（04年）（『シネマルーム4』84頁参照）などのドイツ人監督ローランド・エメリッヒが得意とする「パニック映画」ではなく、同作のテーマはこの大津波によって女性主人公が体験した臨死体験だった（『シネマルーム26』123頁参照）。

それに対して本作は、04年12月26日に発生したスマトラ島沖地震によってタイにある美しいリゾート地カオラックのビーチを襲った大津波の中、奇跡的に生還を果たした実在の家族5人の真実の物語を映画化したもの。監督はJ・A・バヨナというスペイン生まれの若手で、『永遠のこどもたち』（07年）という作品で高く評価されたそうだが、私はこれを観ていないからこの監督については何も言えない。しかし、本作で主演するのは、妻のマリアを演ずるナオミ・ワッツと、夫のヘンリーを演ずるユアン・マクレガーの2人。しかも、ナオミ・ワッツは本作でアカデミー賞主演女優賞とゴールデン・グローブ賞主演女優賞の両方にノミネートされたというから、こりゃ必見！

<主演女優賞がダメなら、せめて敢闘賞を！>

お相撲さんは年間6場所ある15日間の本場所で幕内最高優勝を飾るのが目標だが、男優・女優にとっては、さまざまな映画祭で自分が出演した映画が作品賞や監督賞を受賞するのうれしいが、なんと言っても主演男（女）優賞を受賞するのが最大の目標だ。本作では『天使と悪魔』（09年）（『シネマルーム23』10頁参照）、『フィリップ、君を愛してる！』（09年）（『シネマルーム24』169頁参照）、『ヤギと男と男と壁と』（09年）（『シネマルーム25』未掲載）、『アメリカ 永遠の翼』（09年）（『シネマルーム26』未掲載）、『ゴーストライター』（10年）（『シネマルーム27』143頁参照）、『人生はピギナーズ』（10年）（『シネマルーム28』200頁参照）、『砂漠でサーモン・フィッシング』（11年）（『シネマルーム30』74頁参照）などで多様な役を見事に演じ分けているユアン・マクレガーの熱演も光っている。しかし、大津波に巻き込まれ、それこそ『ヒア アフター』におけるマリー・ルレの臨死体験と同じような水の中での壮絶な格闘を見せるナオミ・ワッツの熱演に比べると、彼にはそんな出番がないだけに本作での主演男優賞へのノミネートはムリ・・・？

他方、ナオミ・ワッツのアカデミー賞主演女優賞ノミネートは『21グラム』（03年）（『シネマルーム4』257頁参照）に続く2度目だが、賞レースはまだ始まったばかりだから受賞の可能性は全くわからない。大相撲では幕内最高優勝は逃しても、敢闘賞・殊勲賞・技能賞という三賞がある。それを考えると、仮にナオミ・ワッツが主演女優賞を受賞できなくても、本作における水との格闘ぶりを見れば、せめて敢闘賞はあげてもいいのでは・・・。

<男は試練の中でこそ育つもの！>

「獅子の子落とし」ということわざがある。ここで言う「獅子」とはライオンではなく、中国の清涼山に棲むとされる伝説上の聖獣のことで、文殊菩薩の乗り物とされる。その意味は自分の子に苦しい思いをさせて力量を試し、這い上がってきた者だけを立派に育てるということだ。イギリス人であるベネット一家がタイのプーケット空港に降り立ち、カオラックのリゾート地に向かったのは、クリスマスを含む冬季休暇を過ごすため。妻のマリアは元医師だが、子育てのために医師業を中断しているらしい。もっとも、リゾート地でもケータイで仕事の心配をしているヘンリーに対してマリアは、もしヘンリーの仕事が不安定になれば自分が医師に復帰するとともに一家でイギリスに帰ろうと提案しているところを見ると、この一家の経済基盤は盤石らしい。マリアとヘンリーには長男ルーカス（トム・ホランド）をはじめ、次男トマス（サミュエル・ジョスリン）、三男サイモン（オークリー・ペンダーガスト）という3人の男の子がいるから、子育ては大変なはずだ。

本作冒頭でマリアと共に大津波の中で水と格闘する役を演ずるのが長男ルーカスだが、本作ではこのルーカスがストーリー展開上ヘンリー以上の重要な役を担っている。本作のパンフレットには、映画評論家・大場正明氏の「イニシエーションなき時代における、大人になるためのイニシエーションを描いた映画」というコラムがある。イニシエーションとは、大人になるための通過儀礼のことだ。飛行機の中で次男のトマスに対して冷たく当たっているルーカスを見ていると、長男のくせに、いや長男なればこそその「わがまま息子」というイメージが強いが、さて本作に見る、彼にとってのイニシエーションとは？

<ルーカスにとってのイニシエーションとは？>

大津波に出会ったことによってルーカスが最初に直面するイニシエーションは、水との格闘は終えたものの怪我した足を引きずる母親のマリアと共に救助を求めて歩いている途中で、幼い子供ダニエルを見つけた時。「とにかく危険だから早く逃げよう」と主張するルーカスに対してマリアは、トマスもサイモンも孤独な中で誰かの助けを求めているかもしれないのだから「助けを求めているこの男の子の声を無視してはダメ」と諭すのだが、さてそれに対するルーカスの反応は？もし、この時点でマリアとルーカスがダニエルを見捨て自分たちだけで逃げていたら、本作ラストにルーカスが目にしたダニエルと父親との涙の再会という感動的な情景は生まれなかったはずだ。

さらに、やっと病院に運び込まれたものの、胸のケガや足のケガが意外に重いことを知ったマリアが自分が医師であることを十分自覚したうえ、現地の医師に対してさまざまな適切な指示を下す姿は立派なもの。さらにマリアは、傍に付き添っているルーカスに対して「この状況下でも何か役に立てることはないかをしっかり考えなさい」とアドバイスしたのも立派だ。家族を求めて捜し歩いているのは自分たちだけではないことがわかったルーカスが、そこで取り始めたある行動とは・・・？このように、マリアがルーカスに対してさまざまな課題を与え、ルーカスがそれに応えていく中でこそ男の成長が生まれてくるわけだ。

本作に見るルーカスにとってのさまざまなイニシエーションに注目しながら、

「男は試練の中でこそ育つものだ」ということを、しっかり確認したい。

<結末はわかっている、映画なればこそその感動を！>

本作中盤は、幼い次男トマス、三男サイモンと共に、あの大津波の被害を免れたヘンリーが、妻とルーカスを必死に捜し求める姿が描かれる。客観的に言うと、あの大津波が襲ってくる中、よくぞヘンリーとトマス、サイモンの2人が一緒に助かったものだと思うにはいられない。

それはともかく、ベネット一家にとっては、否応なく2つに分離され互いに安否がわからなくなっているものの、私たち観客にはベネット一家が全員無事であることがわかっているので、その後のストーリー展開のポイントはいかに感動的に2つに分離された家族が再会できるかにかかってくる。もっとも、病院の治療体制が混乱し、十分な治療を受けられないのは、この非常事態下ではやむをえない。しかし、ルーカスがあるイニシエーション活動に従事している中、重傷を負ったマリアのベッドが他の患者に取り変えられているのはいくら何でもひどすぎるのでは？そのため、ルーカスは今度は病院内でのマリア捜しに奔走しなければならなくなったわけだが、この展開の中、マリアの生死そのものが不明になっていくとひょっとして・・・とってしまう。

しかし、本作は実在する家族の物語を映画化したもので、ベネット一家全員が奇跡的に生き残ることができた姿を感動的に描くものだから、結末はあらかじめわかっている。しかして、映画なればこそそのそんな感動はクライマックスに向けていかに・・・？